目次

はしがき――「放送と都市」という問題設定

第Ⅰ部　戦前の「放送と都市」

第1章　拡がるラジオの「同時性」空間……3
――放送による帝都への集権化――

1　ラジオという共同体験　3
「同時性」空間の誕生　放送と帝都

2　放送空間としての東京　5
帝都の近代化　後藤新平のラジオ観　愛宕山という中心点

3　東京から全国放送網の敷設へ　10
東京放送局の画策　日本放送協会の誕生　大正天皇の哀音　昭和天皇の祝音

4　勃興するラジオの「同時性」論　16
ラジオ・ジャーナリズム論　東京集権論／地方周縁論

5　「同時性」のナショナリズム　22

ラジオとオリンピック　〝幻〟の東京オリンピック放送
6 「同時性」空間の帰結 26

第2章 アンテナ塔のある風景 29
——一九二〇年代のラジオ都市——
1 ラジオというメディア技術 29
ラジオが変えた「時間」　ラジオと戦争　インフラとしてのラジオ
2 東京放送局のラジオ風景 33
山の放送局　現代的東京風景
3 大阪放送局のラジオ風景 36
客寄せとしての放送局　帝都と商都の違い
4 戦後のアンテナ塔へ 39
東京タワーという都市のシンボル　放送技術と都市空間

第3章 南方放送 43
——外地における放送空間——
1 「南方放送史」再考 43
大東亜共栄圏と放送　激戦地（フィリピンとビルマ）での放送
2 米英領からの放送転換 46
比島放送管理局の始まり　緬甸放送管理局の始まり
3 比島放送管理局の放送工作 49
音楽による現地住民の宣撫　米比軍への対敵放送

4　緬甸放送管理局の放送工作　54
放送による日本文化の浸透　インドへの対敵放送
5　果たせなかった放送工作　58
比島管理放送局の終わり　緬甸管理放送局の終わり
6　南方放送史を編み直す　62
激戦地における放送の潰散　戦時下の「放送と都市」の終焉

第Ⅱ部　「放送と都市」の戦後

第4章　テレビにみる高度成長期の東京……69
——放送と首都の一九六四年——
1　テレビ時代の都市東京　69
交錯する「一〇〇〇万」　東京とテレビの相互依存
2　テレビがつくる東京一九六四　72
メディア・イベントとしてのオリンピック　東京への凝集　東京からの拡散
3　東京のなかのテレビ一九六四　78
都市空間のなかのテレビ局　放送センターの建設　渋谷という中継点
4　テレビのなかの東京一九六四　82
近未来都市・東京の映像化　東京計画一九六〇　NHK『新しい東京「夢の都市計画」』

5　東京一極集中とテレビ　88

第5章　テレビに封印された都市の記憶……93
――「一人称の眼」の発見――

1　ヒューマン・ドキュメンタリーの発生　93
NHK『ある人生』と一九六〇年代　「人」を描き始めるテレビ

2　NHK『特集　TOKYO』の視線　97
一〇〇〇万の孤独　一人の女性に都市の記憶を仮託する

3　メディアから読み解く都市の記憶　100
文学の都市論からテレビの都市論へ　テレビの「虫かん図的認識」

4　テレビと都市と人間と　103
高度成長期の都市を捉える　「都市の歪み」を映し始めるテレビ

第6章　農村の闘い……107
――テレビが捉えた都鄙(1)――

1　繁栄の谷間　107
オリンピック都市・東京批判　テレビと一九七〇年代

2　秋田放送が描いた大潟村　111
モデル農村の四〇年　地方局だから撮れるもの　秋田放送の制作者たち

3　秋田放送がつないだバトン　114
大潟村が揺れた時代――一九七〇年代～八〇年代前半
大潟村の余震――一九八〇年代後半～二〇〇〇年代　大潟村の総括――二〇一〇年代

4 農民に寄り添うカメラ　121
地方から全国に放送すること　秋田放送独自の視点
5 テレビにみる「地方の時代」　123
ニュー・ローカリズムの高まり　地域を凝視める眼

第7章　水俣映像譚……127
――テレビが捉えた都鄙(2)――
1 闘ぎあう水俣の表象　127
水俣を語ること　水俣を語らないこと　水俣と映像
2 水俣の経験はどこからくるのか　131
文学・写真のなかの水俣　NHK「奇病のかげに」の衝撃　一九七〇年代のテレビと水俣
3 水俣を撮るということ　136
土本典昭とテレビ　患者さんとその世界　巡海上映という方法論　稀有の聖なる一回性
4 水俣に住むということ　143
不知火海の美しさ　水俣にとどまるという決意
5 水俣の表象と語りのはざま　148
映像による叙事詩　水俣表象の反発のかげに　患者の世界からの逆照射

第Ⅲ部　「放送と都市」のゆくえ

第8章　テレビが描いた震災地図 ……157
——放送と三・一一——

1　東日本大震災とテレビ報道　157
語られたテレビの「功」　語られたテレビの「罪」　アーカイブによる検証

2　震災報道の地域偏在　163
県別の定量把握　市町村別の定量把握

3　地域偏在が生じた理由　166
検証(1)——被害の程度　検証(2)——地理　検証(3)——津波の記憶　福島の場合

4　震災一年の物語　172
野田村報道の一年　山元町報道の一年　南三陸町報道の一年

5　震災報道の「過密」と「過疎」　181
報道の地域偏在の影響　アーカイブ時代の災害報道研究

第9章　テレビジョン・ツーリズム ……185
——家で旅を見ることの系譜——

1　テレビジョン・ツーリズムの発生　185
映像と旅　テレビの歩き方

2　旅情そそるテレビ越しの日本の風景　187
地理テレビの登場　NHK『新日本紀行』と一九七〇年代
旅人の視点『遠くへ行きたい』
3　テレビの眼は世界へ　191
嚆矢としての『兼高かおる世界の旅』　映像人類学の発生　地上最後の秘境シルクロード
4　テレビ旅のバラエティ化　197
クイズを通して世界を知る　旅のリアリティ・ショーを見る
テレビの自作自演的〈風景〉　二〇一〇年代の新たなテレビジョン・ツーリズム
5　ポストテレビ時代の映像ツーリズム　206
テレビによる「イメージの旅」　テレビと旅の関係の終焉

第10章　これからの放送研究に向けて……210
――改めて「放送と都市」の意義を問い直す――
1　戦前から戦後の放送研究　210
ラジオ研究の始まり　テレビ研究の始まり
2　テレビ研究の発展　213
文明論的テレビ論の高まり　「放送学」の誕生と挫折　関西からのテレビ論
3　テレビ研究の模索　217
テレビ研究の振りかえりへ　テレビを見る経験を問う
4　放送史の検証へ　220
ラジオ史を遡る　テレビ史を遡る
5　放送研究の方向性　223

参考文献 227
あとがき 241
関係年表 245
人名索引